

過去の地震から知る、未来の備え ～どうやって安否を確認する？

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■嫁いだ娘の安否が心配でいたたまれなく、父親は余震とガレキの集落の中を必死になって走っていった。(明治村東端集落(安城市東端町)・杉浦隆三さん)

真夜中の地震。ゆれが大きく、寝ていた母屋は傾いてしまった。家族は母屋を飛び出して納屋に入り、余震が続く中、夜が明けるまで震えながら納屋に避難していた。

しかし父親だけは、同じ集落のはずれに嫁いだ娘の安否が気になっていたため、余震が続きガレキが散乱する集落の中を、必死になって娘の嫁ぎ先まで走っていった。



絵 藤田哲也

被災者の方へインタビューをすると、「安否確認がすんなりいったからよかった」とか「いつまでも家族が無事かどうかわからずに、ただそれだけが気がかりで、他のことなど手につかなかった」という話をよく聞きます。ここでのポイントは、安否確認ができなかった場合には、安否確認が達成されるまで、被災者は安否確認ばかりが頭について「居ても立ってもいられない」状況になってしまうことです。その結果、他に行うべきたくさんの方の行動にとりかかることができず、何もかもが後手後手にまわってしまい、最終的な生活再建も遅くなってしまうことが考えられます。

現代では、①携帯電話メール、②災害用伝言ダイヤル171、③遠方の親せきを連絡拠点にする、の3つが効果的であると言われています。

携帯電話メールは、音声とちがい災害時でも届きやすいことがわかっています。また災害時に携帯電話でインターネットにつながると「災害用伝言板」がトップメニューに出てきて、そこから安否確認のやり取りをすることもできます。詳細は各携帯会社のホームページをご覧ください。

災害用伝言ダイヤル171も有効です。これは災害発生時に171番に電話をかけ、音声ガイダンスに従って「被災地内の電話番号(市外局番を含む)」を暗証番号にすると、1件あたり30秒の伝言を計10件まで預かってくれ、聞くこともできるサービスです。防災週間(防災の日(9月1日)を含む1週間)や防災ボランティア週間(1月15日～1月21日)などでも体験することができます。

被災地ではない遠方にいる親せきを連絡拠点にすることも効果的です。災害が発生すると、大勢の人が被災地内に電話をかけるため、固定電話・携帯電話ともにつながりにくくなります。しかし被災地内から外へかける電話はつながりやすいため、遠方の親せきに家族の安否確認の取りまとめや会社・学校への連絡をしてもらえるのならば、被災者は安否確認に忙殺されずに、速やかに別の行動に着手することができます。